

小学校外国語活動における文字指導の考案 —第6学年、夏休み前のListeningとReadingの理解力向上のための取り組み—

松原 留美

九州女子大学人間科学部児童・幼児教育学科 北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1 (〒807-8586)

(2023年11月6日受付、2024年1月11日受理)

要 旨

本研究は、中学校での英語学習につながる第6学年の文字指導を効果的に進めていく方法を考案することを目的としている。中学校での英語学習の際に起こりうるつまづきの一つとして挙げられるのは、単語を読むことの難しさであるが、それを少しでも軽減しながら中学校の英語へ導くことを念頭に置いている。本論では、2学期、3学期に文字指導を効果的に導入していくための初段階での指導法を提示する。

Junior Sunshine 6 (開隆堂) を教科書として使用しているK市立Z小学校の第6学年3クラスを対象として指導をすすめ、3学期終了時にアンケート調査を行い、結果を報告する計画である。

現在、日本の小学校の6割で使用されている教科書、*Junior Sunshine* (開隆堂) では、第5学年までは、ListeningとSpeakingの活動を中心とした内容で学習がすすめられ、第6学年になると、各ユニットでWritingを行う内容が加わる。その際、十分な「文字慣れ」が行われていないと、学習についていけない児童が増えることが懸念される。そこで、文字の学習が、児童にとって、できるだけ楽しく、理解したことを児童自身が実感できることを促すために、段階的な指導方法を提案したい。

本論では、一学期の夏休み前の週一回の授業、2コマ分の授業を行った際の児童の様子と学習状況を述べる。この学習を通してわかったことは、1時限目に、ある程度内容を知っている物語を英語で聴いて、内容を理解できたほとんどの児童が感じたこと、そして、単語と主語となる代名詞の理解を踏まえて、内容をさらに理解したと児童が感じたこと、さらに2時限目では、1時限目と同じ長文を聴きながら、音声と物語の文章を重ねて読むことで、英語が読めたと実感した児童が多かったことである。

この取り組みの結果により、今後、文字を読むことに十分な時間を取って、Writingの内容へ移行していく必要があることを提示していきたい。

キーワード：小学校外国語活動、Reading指導法、英語教育の小中連携

1. はじめに

平成29年度3月に文部科学省が新小学校学習指導要領を告示し、平成30年、31年の移行期を経て6年が経過した。この間、年間35時間という改訂前と同じ時間数を担当しながら、令和2年以降も、小学校教員は外国語を正規の科目として扱い、成績をつけることにも慣れてきた。文部科学省は、様々な音声や動画のデータをダウンロード可能にし、ICTを活用できる環境を整えてきた。文部科学省が提示する小学校外国語活動における目標は、「外国語によるコミュニケーションにおける見方、考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、簡単な情報や考えなどを理解したり表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力を次のとおり育成することを目指す。」(小学校学習指導要領の外国語の目標 第1 目標)とある。目指したのは、外国語によるコミュニケーションの中で、どのような視点で物事を捉え、思考していくのかという点で、「外国語で表現し伝え合うため、外国語やその背景にある文化を、社会や世界、他者との関わりに着目して捉え、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて、情報を整理しながら考えなどを形成、再構築すること」であると記されている(ガイドブック 15)。つまり、まず、単に外国語の単語や表現の意味を知識として知るだけでなく、他者の文化的・社会的背景を含めて理解しようとし、配慮をすることができることを前提とする。そして、既習の知識を相互に関連付け、思考力を駆使して、外国語活動を通して練習した表現活動を使って、自分の考えを構築し、相手に伝えることができるようになることを目指している。中央教育審議会は、こういった思考活動

の中で、児童の言語力が育成され、学習活動を支える重要な役割を果たすと示唆しているのである（ガイドブック 16）。

また、平成22年度に全面実施された学習指導要領に改編が加えられた部分に着目してみると、改訂前の目標、「①言語や文化に関する体験的な理解」、に対して、「①外国語を通して、言語や文化について体験的に理解を深め、日本語と外国語との音声の違い等に気付くとともに、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しむようにする。」と改編され、音声の特徴をつかむことを念頭に入れ、小学校で学んだことをより円滑に中学校での英語教育に接続していくことが具体的な目標として掲げられている。つまり、音声の違いを意識することを重視しながら、中学校での学習における単語やフレーズの習得をし易くすると考えられる。

令和4年度、文部科学省が行った「英語教育実施状況調査」によると、9,208校の公立中学生の生徒を対象に調査した際の英語力について、CEFR A1レベル（英検3級相当）の生徒の割合が、目標50%に対して49.2%であったと報告された。これは、前年度、46.1%を上回り、全国的に英語力の毎年2%程度の伸びが確認できる。しかし、この調査では、残り53.9%の生徒に関する情報の詳細は述べられていない。この53.9%の生徒の中には、英語に苦手意識を感じている生徒もいるであろうことが推測される。それに関して、ベネッセ教育総合研究所が平成30年に行った中学3年生の英語学習に関する調査において、英語が苦手と感じるようになった時期が多いのは、中学1年生の後半であると報告されている¹。これは、苦手意識をもっている生徒の23.3%の回答である（長谷川 23）。この時期、英語学習の内容が複数形や一般動詞の疑問文（*New Horizon*、東京書籍）などが中間テストに出題され、三単現の動詞の作り方など、複雑な決まり事を覚えることに難しさを感じる生徒が増えていることが考えられる。

このような、中1の英語のつまずきは、小学校外国語科目において、どのように払拭することが可能であるか、本論では、特につまずきを感じ易い児童・生徒に焦点をあてた。フォニックス（*phonics*）²指導は、音と文字の結びつきを知ることで、単語のひとかたまりが形成している音声を認識する一つの方法であり、この方法が児童の今後のつまずきの攻略方法として考えられるため、今回の授業のように、文章に含まれる単語に着目しながらReadingをすすめる以下の指導法を提案した。

2. 考察の方法

本研究では、*Junior Sunshine* 6（開隆堂）のLesson 5の内容を使用する。開隆堂が推奨している指導案によると、単元、Lesson 5 “I want to see the Milky Way.” の到達目標は、Lesson5の七夕の物語を英語で聴き、ある程度理解できるようになることが第一の目当てであり、その後、物語の中に使われている“want to”を使って、児童自身が「したいこと」をルールに気を付けながら書けるようになることである。本授業内では、さらに、短冊に各児童が自分の願いを書いて、O市の神社の七夕祭りに奉納することを計画し、児童の「したいこと」の表現が、身近で独自のものとなることを狙った。

時数は、開隆堂の提案では4時数であるが、本研究内は2時数内で行った。1時数目で、教科書に付随して準備されている以下の七夕の話を聴き（引用1）、おおそ理解がきることを目当てとし、実際に聴いた内容を文字で確認しながら内容を解説した。2時数目には、「“want to”+動詞」に当てはまる15の表現を発声しながら表現に慣れ親しみ、その後、自分の場合の「“want to”+動詞」を考えるように促した。授業の中盤では、教科書に準備されたWriting用の4線ノートの箇所に行き、各自自分のしたいことについて英文を書いた。教科書Writing用の箇所は、英語書き用の4線ノートと同じく、以下のように、下線が引かれたものを使用した（図1）。その後、短冊に改めて自分の願いを書き入れた。書いた内容について、発表したい児童を指名し、クラス全員に発表してもらった。

（引用1）

You can see three big stars in the night summer sky. They are Vega, Deneb and Altair.
(Narration)

Vega is *Orihime*, in the story. Altair is *Hikoboshi*. (Narration)

You can see the Milky way between Vega and Altair. (Narration)

He is *Hikoboshi*. He is the cattle farmer, *Ushikai*. (Narration)

She is *Orihime*. She can make cloth. (Narration)

Oh, beautiful. (*Hikoboshi* says)

Hikoboshi and *Orihime* love each other so much. They don't work hard. (Narration)

Oh, I'm so hungry. I want to eat grass. (cow says)

I am bored. I want to make clothes (cloth says).

God is very angry. (Narration)

Hikoboshi, you go to this side of the Milky Way. *Orihime*, you go to that side. (God says)

Hikoboshi, I want to see you. (*Orihime* says)

Orihime, I want to see you. (*Hikoboshi* says)

We can work hard. We want to meet again. (*Orihime* and *Hikoboshi* says)

OK. You can meet on July 7th every year. (God says)

On that way, people display bamboo grass. We write a wish on *Tanzaku*. (Narration)

The wish can come true. (Narration)

[()内の役の名前は筆者により加筆したもの]

(図1)



夏休みにしたいことを考えて、書こう。✎

日本語 ()

英語

I want to

3. 授業の進め方

物語を聴く前に、教科書にある代名詞の主語の使い方をチャンツとジェスチャーで覚えるための活動を行った。(図2) さらに、事前に“see”「会う」と“meet”「会う」の使い方の違いを、例を挙げて説明した。

例1：

A: Hello. I'm Sara. Nice to meet you.

B: Hello, Sara. I'm Mike. Nice to meet you, too.

児童は、*Junior Sunshine5* Lesson1ですでに学習している自己紹介の表現を思い出し、“meet”がはじめて会った人同士で使われる表現であることを確認した。

例2：

A: Hi, Yuri. I'm glad to see you again here.

B: Hi Sam. What a surprise! I'm glad to see you again, too.

児童は、“see”が2回目以上、互いに会う者同士の間で使われる語であることを確認した。また、次のように、“see”が別れのあいさつに使われていることも確認した。

例3：

A: It's so nice to talk to you. See you, Yuri.

B: Yeah. It was nice. See you, Sam.

“See you!” は、児童がいつもALTとの挨拶で、すでに慣れ親しんでいる表現である。このように、児童がすでに知っている表現を使って、長文の中に知っている語が含まれ、知らない語に出会っても、知っている語から状況を推測できる力を伸ばそうとすることが必要であろう。このような理解力へ導く方法は、後で述べるように、認知言語学的な取り組みと言える。

また、発音のポイントとして、“see”と“she”「彼女は」の発音の仕方の違いを説明し全員で発音練習をした。この発声法の指導については、3学期以降に連載する本調査においてまとめるが、聴いて分かり易いように、“see”や“she”と発音する時のそれぞれの口の形や舌の位置を図に書いて説明した。

これらの語について児童から質問が出たのは、“sea”「海」と“see”の違いであった。この質問によって、同じ発音でも、綴りが違い、また意味も違うことを学習した。この方法も後で述べる認知的な方法で、それぞれの語が持つ意味に幅を持たせて理解しようとする姿勢を形成するのに役立つと考えられる。

次に、七夕の話に使われている、織姫をあらわす星、こと座のベガ (Vega) と彦星をあらわす星、わし座のアルタイル (Altair) がつくる夏の第三角形の解説と天の川 (the Milky Way) の位置の解説をした。この際、黒板にすでに表記している全英文の中の、Vega、Altairを指して児童にその単語が書かれている箇所を示した。また、天の川の両側に“this”「こちら」と“that”「あちら」、「between」「間」と書いて、位置の示し方や、代名詞“this”と“that”を解説した。

児童は七夕の物語をある程度知っているという前提で、知っていることを英語に直すとういうのか、また、名前などの日本語はそのままに発音し、表記するときはイタリックであらわすことを説明した。

また、“can”「できる」を使った表現は、第5学年で*Junior Sunshine 5*ですでに学習したので、児童は“You can see three big stars in the night summer sky.”「(あなたは)夏の夜空に3つの大きな星を見ることができますよ。(拙訳)」や“You can see the Milky way between Vega and Altair.”「(あなたは)天の川の間ベガとアルタイルを見ることができますよ。(拙訳)」などの表現には慣れていた。しかし、日本語に訳して説明する時は、できるだけ児童が慣れている「can=できる」の表現からイメージが離れないように、「見ることができる。」と訳し、「見える」とは訳さないように留意した。

さらに、“I’m so hungry.”、“I am bored.”、“God is very angry.”などのbe動詞を使った表現にも児童は慣れているので、児童に“I’m fine.”や“I’m happy.”などで自分の気持ちを表現した語と同じ使い方であることを確認した。しかし、“bored”「退屈な」は、*Junior Sunshine 6*では初出の単語であるため、ジェスチャーや顔の表情を使って、どのような気持ちなのかを説明した。

実際に物語を聴く段階になると、はじめに教科書に付随している動画をスクリーンに映し出して、動画と音声で内容を理解するように促した。その後、担任が内容のあらすじを述べ、児童が内容を理解したことを確認した。次に、音声のみを使い、黒板に板書した引用1の英文を指しながら内容を確認した。文章の中に出てくる主語となる代名詞、“he”、“she”、“we”にチェックを入れながら、1回目の音声を聴いた。2回目に、本単元のキーワードとなる“want to”が書かれている箇所に下線を入れて、牛 (cow) や布 (cloth)、そして織姫と彦星が何をしたいのかを確認した。

最後に、次回行う“want to”を使った表現の予習をした。教科書に記された15の内容(図3)を見ながら教師の発音を聴き、その後、指差しながら各行動を言う練習をした。その際、教室に設置されているキーボードのリズムを使って練習した。発声する際に、英語のリズムに注意して、より伝わり易い音声を作り出すためである。そして、次回の授業で、短冊に願い事を書くことを予告し、何を書くか考えておくようにすすめた。

2時数目は、再度前回の15の行動を言う練習をして、その中から自分が夏休みにしたいことを選び、事前に準備したプリントを使って、クラスメートのそれぞれの夏休みにしたい“want to”をたずねる活動をした。この時、たずねるキーワードとして、“What do you want to do?”「何がしたいの?」と言って、相手に「したいこと」をたずねる練習をした。

プリントには、英語でメモを取ることも、日本語でメモを取る程度でよいことを伝え、できるだけ表

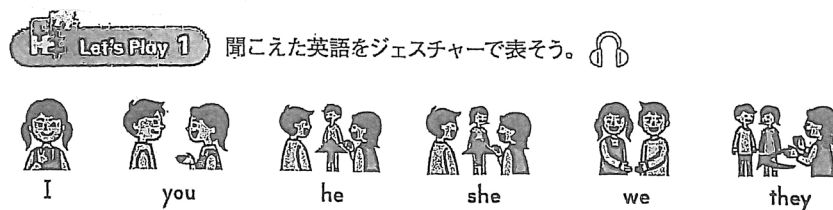
現を使ってみる練習をするよう促した。何人のクラスメートにたずねることができたか、“How many friend did you ask?”「何人の友達に聞きましたか？」と声掛けしながら、自分がたずねた人数に合わせて挙手をしてもらった。活動のまとめと、教師との英語でのやり取りを成立させた経験を感じてもらおうことが狙いであった。

次に、自分が使った「したいこと」の表現を教科書の4線ノートの箇所(図1)に書く活動をした。この際、教師は黒板に4線ノートを作成して、第5学年で学習したノートの線の使い方を復習した。

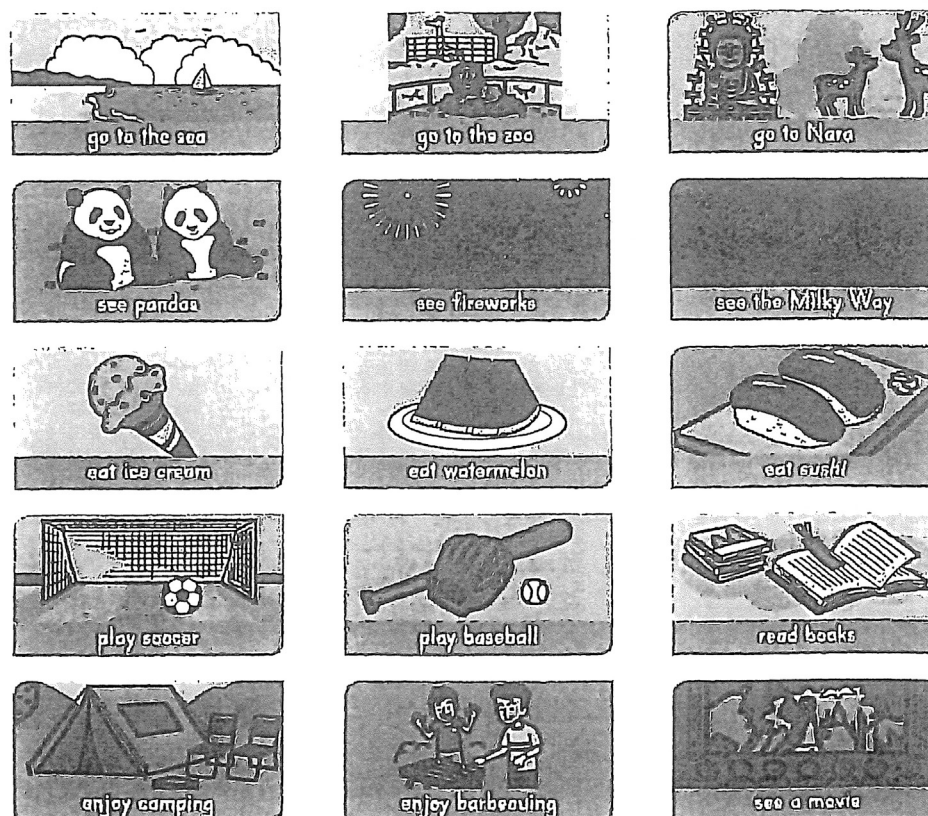
最後に短冊に書く内容を考えて、わからない表現を教師にたずねるように促した。教師はそれぞれの言い方を黒板に示して、書く内容のサンプルを示した。

2コマの授業をとおして、会話のやり取りの理解を高めるためには、できるだけ目で見分り易い説明ができるように、人形を使う、または担任と寸劇をすることが有効であると感じた。これはまた、教室に楽しい雰囲気をつくる手段ともなり得ると考えられる。さらに、回りくどい説明をせずに、短い説明で、児童に理解してもらえるよう教材を準備することが理想的だと感じた。

(図2)



(図3)



4. まとめ—思考力と再構築する力

今回の2コマの授業では、児童が知っていることを活かして外国語を理解することができるという体験をしてもらった。キーワードとなる、代名詞の主語や特定の言い回し、今回は「“want to”+動詞」の使い方を知り、文として構成する方法を知って、様々な表現ができるという体験であった。児童からは、「学習した内容がわかった」、「“want to”が使えるようになった」などの感想が多く聞かれた。

本時で留意したことは、児童がすでに知っていることの上に、いかに新しい情報を無理なくインプットできるかという点であった。このような指導方法は、認知言語学の領域に関わるものである。認知言語学は、すでに知っている事柄をもとに自分の考えを構築することを主たる理念とするものであるが、理解（認知）の媒体となる“mind”が、受け入れる、再構築する、新しい表現として発信するという3段階を経て、語学力を高める効果があると考えられる分野である。2008年、新谷は、言語学習においては、言語が「情報の流れ」（新谷 176）によって適切に用いられるものであると述べた。つまり、一つの語にたくさんの意味があり、微妙なニュアンスの差があることなどを踏まえて、言語の多義性を「認知フレーム」と解釈し、体系的に意味づけできる指導の仕方が必要だというのだ。これは生徒が単語の意味の幅を柔軟に受け取り、解釈しようとする姿勢を持てるようになることを狙う考え方である。

認知言語学について、山本は2015年、改訂前の学習指導要領の中で、「読むこと、書くこと」が軽視されていることに懸念を示し、英語学習は、基礎段階で「学習」（意識化）と「獲得」（自動化）という2つの側面をもつという視点で行う必要があると述べた（山本 27-28）。つまり、「学習」とは、文法知識、母語を使用した理解と思考を通して効率的に英語を学ぶ方法と、「獲得」は外国語に多く振れ、慣れることを中心に英語力をつけるという方法であり、この2通りを同時進行で授業をすすめることを提案していると考えられる。この2つの方法は、認知言語学の、言語は人間の認知の営みによって意味付けされてはじめて概念化されることを前提としおり、どちらの方法もこの概念化において共通するということである。これらは、一見真逆のアプローチのようであるが、小学校の場合、この2つの方法を使い分けることをALTや担任に任せるのは困難であると想像されながらも、授業内容は、この2つのアプローチを使い分けながらすすめていくことが効果的であると言えそうである。上の先行研究を参考にして、2学期、3学期の取り組みには認知言語学の概念を取り入れて授業をすすめたいと考えている。

平成29年に告示された新学習指導要領において、外国語の目標として強調して掲げられたのは、「思考力、判断力、表現力」であった。今回の取り組みは、まず、思考力を育成することに重点を置き、知っている物語を使って、その傍ら、代名詞の使い方や星の名前などの単語を新しい情報として提供し、全体の内容を理解しようとすることに導いた。その後、児童は自分が得た情報を使って新たに自己の考えを構築する方法を使ってみることに、また、作成した文章で他者とコミュニケーションを取る体験をした。この際、児童は自分の考えを学習した内容を使って再構築を試みた。

最後に、思考力とは何かということであるが、中井は「様々な環境の下で、何が求められているのかを把握し、その状況にふさわしい展開の方途を考え出す主体的な学び」（中井 158）であると述べている。単に外国語の単語や表現の意味を知るだけではなく、他者の文化的・社会的背景を理解し配慮しながら、場に応じた表現ができるようになることを目指し、小学校外国語活動では、児童に明確さと柔軟さを兼ね備えた解釈を促しながら、授業プランを考慮していくべきだろう。

註：

1. 2014年のベネッセ総合教育研究所の調査では、中学一年生の英語のつまづきを感じる場合の3つの項目を挙げている。①文法が難しい 70% ②英語の文を書くのが難しい 63.6% ③ 単語を覚えるのが難しい 62.9%
2. フォニックスとは、音素（Phoneme）とアルファベットの結びつきを教えることで読む力を高めようとする方法である。

参考・引用文献

尾関直子、「英語学習と心理要因」村野井仁、渡部良典、尾関直子、富田祐一 編著、『統合的英語科教育法』成美堂 2012, pp.163-179.

塩谷英一郎、「語学教育・英語教育における認知言語学の役割」『帝京大学外国語外国文化』帝京大学外国語学部外国語学科 2008, pp.173-188.

中井弘一、「英語授業における『思考力・判断力・表現力』育成の方途」『大阪女学院大学教職課程機関誌：

OJC教職活動報告・研究』3, 2012, pp.156-166.

長谷川修治. 「中学1年生の意識調査から見た小学校英語のあり方—5, 6年生に焦点を当てて」『植草学園大学紀要』第15号, 2023, pp.21-32.

ベネッセ教育総合研究所. 『小学校英語に関する調査—小学校学習指導要領全面実施前後での児童の英語力及び意識の変容』 https://berd.benesse.jp/up_images/research/research_230830.pdf, 2023年11月4日確認.

ベネッセ教育総合研究所. 『小学校英語に関する調査研究』

<https://www.berd.benesse.jp/global/research/detail.php?id=5884>, 2023年11月4日確認.

文部科学省. 『小学校学習指導要領 解説外国語活動編・外国語編』開隆堂出版、2017.

文部科学省. 『小学校外国語活動・外国語 研修ガイドブック』旺文社、2017.

文部科学省. 『令和4年度英語教育実施状況調査 概要』 https://www.mext.go.jp/content/20230516-mxt_kyoiku01-0002985_1.pdf, 2023年11月4日確認.

山本幸一. 「認知言語学を応用した英語学習—英語学習の効率化に向けて—」Language & Literature (Japan) 24、愛知淑徳大学大学院英文学会 2015, pp.27-42.

Adams, M.J. *Beginning to Read: Thinking and Learning about Print*. Cambridge, 1990.

Littlemore, Jeannette. *Applying Cognitive Linguistics to Second Language Learning and Teaching*. Springer Nature, 2023.

A Teaching Method of Elementary School Foreign Language Activities for 6th Grader —An Attempt to Improve Listening and Reading Comprehension before Summer Vacation—

Rumi MATSUBARA

Department of Education and Psychology, Faculty of Humanities

807-8586 1-1Jiyugaoka Yahatanishi-ku Kitakyushu-city

Abstract

The purpose of this research is to devise an effective method for teaching the alphabet and phonics to the 6th grade students with the aim of facilitating smoother English language acquisition during subsequent years in junior high school. One of the “stumbling blocks” that can occur when learning English at junior high school is the difficulty of reading and memorizing words. Therefore, this study seeks to mitigate this obstacle by implementing effective instructional strategies during the 6th grade, thereby laying a foundation for enhanced English proficiency in junior high school. In this paper, I will present teaching methods at the initial stage to effectively introduce reading instruction in the second and third semesters of the 6th grade. The plan is to provide some instructions to three 6th grade classes at K Municipal Z Elementary School, which use *Junior Sunshine 6* (Kairyudo) as a textbook, and to conduct a questionnaire survey at the end of the third semester to gather insights and assess the outcomes of the implemented strategies.

Based on these findings I will highlight the necessity of allocating adequate time to develop foundational reading skills as a precursor to junior high school English education.

Keywords: Elementary School Foreign Language Activities, A Method for Teaching Reading,
Collaboration between Elementary and Junior High Schools in English Education